

『遠野物語』における固有名詞についての一考察

青木俊明

一、はじめに

東京学芸大学大学院では、共同研究として、二〇〇〇年の秋から『遠野物語辞典』を作製した¹⁾。この辞典を作るにあたって、初めの段階では、人物や地名といった固有名詞も辞書の項目として立てる予定でいた。というのも、柳田国男は、地名や人名を『遠野物語』の草稿本の段階で注意深く書き入れたり、また、再校の段階では伏字にしたりして、特に気を配っていたからである²⁾。また、これらの地名や人名が、序文に記されているような「目前の出来事」「現在の事実」を裏付けており、物語にとって重要な要素だからでもある。共同研究をしていた我々も、固有名詞の重要性に気付いていたので、二〇〇二年の春から、共同作業の中で『遠野物語』における人名や地名に関する用例を一つ一つ調べ始めた。その結果、どのように用例を数えるのか多少問題はあるが、地名に関しては一〇六七例、人名については四四五例の用例を集めることができた。そこで、このデータ

をもとに辞典を作り、それぞれの地名・人名を解説するつもりでいたが、最終的には、地名・人名編を作ることは断念した。

というのも、遠野から離れた場所に住む我々は、地名に関しては、実際の地名が持つ意味やイメージも分からなければ、人物についても、物語の用例からでは、人物を特定することも難しく、さらに人名の背後にある血縁関係などがまったくわからないからだ。このような理由から、私たちには、地名や人名を的確に解説できないという結論に至り、『遠野物語辞典』に盛り込むことはあきらめた。しかし、辞書に盛り込むことはできなくても、それでも〈場〉の持つ意味や人名の持つ意味は、『遠野物語』を読む上で欠かすことができない重要な要素であるという認識を私たちは持っていた。

そこで、東京学芸大学大学院の共同研究としては、地名や人名に関する用例を索引に整理することにした³⁾。この索引により、誰がどの話に出てくるのか、また、ある具体的な場所がどの話に出てくるのか、すぐに分かるようになった。その結果、

これまで話ごとにバラバラに存在していた地名や人名が用例ごとに整理され、地名や人名を一つのまとまりとして、読みの対象にできるようにした。

本論では、この索引を利用して、佐々木喜善、土淵村山口を取り上げて、物語の語り手である佐々木喜善が『遠野物語』にいかにかかわっているのか、また土淵村山口という場所が『遠野物語』の中でどのような〈場〉として位置づけられるのかを考えてみたい。

二、『遠野物語』における人名について

—佐々木喜善を例に—

佐々木喜善を取り上げるのには、次の二点の理由がある。佐々木喜善は、物語の語り手であり、また登場人物でもあることから、深く物語とかわわっている。そして、佐々木君や佐々木氏といった用例が、他のどの人名よりも多いからだ。次の【資料1】が、「遠野物語」「遠野物語拾遺」における佐々木喜善に関する用例である。

数字で言うと、佐々木喜善に関する用例は五四例あり、人名に関する用例全体の一二％を占める。一個人の名前が、全体の一二％を占めるとするのは、かなり高い割合だと言えよう。用例を見ると、佐々木喜善の呼び方が、佐々木君や佐々木氏、佐々木鏡石、佐々木喜善といろいろあること、佐々木君だけでなく、

佐々木君に曾祖父や祖父などの親族が付く形、あるいは佐々木君に友人、知人が付く形といろいろな形があることがわかる。

このような用例から、物語の語り手である佐々木喜善と、書き手である柳田との関係から分析してみたい。『遠野物語』初版本の序文には、次のような叙述がある。

この話はすべて遠野の人佐々木鏡石君より聞きたり。昨明治四十二年の二月頃より始めて夜分をりをり訪ね来たり、この話をせられしを筆記せしなり。鏡石君は話上手にはあらざれども誠実なる人なり。自分もまた一字一句をも加減せず感じたるままを書きたり。

これを素直に読むのであれば、柳田は喜善が話したように書き記したことになる。しかし、実際の様子は異なるようだ。喜善が柳田に物語を話す時、自分のことは、「私」「僕」「俺」などの一人称で語ったはずである。物語の叙述のように、喜善が自分のことを佐々木君や佐々木氏といった敬称を付けて呼ぶことは、まずないと思われる。すると、ここに喜善が語ったであろう物語と、柳田が実際に叙述した物語との間に差異があることになる。この違いこそ、書き手である柳田と話者である喜善との力関係を表している。喜善が一人称で語っていたものを、柳田が三人称である佐々木君や佐々木氏に直してしまうことか、これは書き手である柳田に主体性があり、語り手よりも優

【資料1 『遠野物語』における佐々木喜善関係の用例】

話の番号	表記	備考
39	佐々木君	
69	佐々木君	
17	佐々木氏	
22	佐々木氏の曾祖母	喜善の養祖父万蔵の母、ミチ
59	佐々木氏の曾祖母	喜善の養祖父万蔵の母、ミチ
29	佐々木氏の祖父	喜善の養祖父万蔵
39	祖父	喜善の養祖父万蔵
84	佐々木氏の祖父	喜善の養祖父万蔵
35	佐々木氏の祖父の弟	重右衛門、菊池菊三の父か？
22	祖母	祖父万蔵の妻、ノヨ
69	佐々木氏の祖母の姉	ノヨの姉、おひで
69	佐々木氏の伯母	喜善の叔母フクヨの夫の妹、ヨシか？
22	母	喜善の養母、イチ
拾遺 044	佐々木君	
拾遺 048	佐々木君	
拾遺 106	佐々木君	
拾遺 125	佐々木君	
拾遺 160	佐々木君	
拾遺 216	佐々木君	
拾遺 231	佐々木君	
拾遺 235	佐々木君	
拾遺 236	佐々木君	
拾遺 248	佐々木君	
拾遺 293	佐々木君	
拾遺 158	佐々木君の曾祖父	喜善の養祖父万蔵の父、小次郎
拾遺 231	祖父	喜善の養祖父万蔵
拾遺 235	祖父	喜善の養祖父万蔵
拾遺 261	佐々木君の祖母	祖父万蔵の妻、ノヨ
拾遺 263	佐々木君の祖母	祖父万蔵の妻、ノヨ
拾遺 082	佐々木君の母	喜善の養母、イチ
拾遺 261	同君の母	喜善の養母、イチ
拾遺 296	佐々木君の老母	喜善の養母、イチ
拾遺 218	佐々木君縁辺の者	
拾遺 169	佐々木君の知人	岩城某のこと
拾遺 265	佐々木君の知人	
拾遺 046	佐々木君の友人	宮本某のこと
拾遺 155	佐々木君の友人の母	
拾遺 156	佐々木君の友人某	
拾遺 157	佐々木君の友人	俵田某のこと
拾遺 159	佐々木君の友人某という人の妻	
拾遺 162	佐々木君の友人	田尻正一郎のこと
拾遺 173	佐々木君の友人	中館某のこと
拾遺 197	佐々木君の友人	
拾遺 146	佐々木君の上隣にある某家	
拾遺 181	佐々木君の近所のある家	
拾遺 184	佐々木君の隣家	
拾遺 249	佐々木君の家	
拾遺 239	佐々木君の隣家のむ住め	
拾遺 259	佐々木君の村の者	

位な立場で物語を叙述していることになるのである。

また、喜善にかかわる語彙の用例から、喜善がどのように話を収集していたのかも知ることができる。いくつか具体的な例を挙げたい。次に引用する「遠野物語」五九話は、喜善の曾祖母が幼かった頃、カッパを見たという話である。

外の地にては河童の顔は青しといふやうなれど、遠野の河童は面の色赭きなり。佐々木氏の曾祖母、穉かりし頃友だちと庭にて遊びてありしに、三本ばかりある胡桃の木の間より、まっ赤なる顔したる男の子の顔見えたり。これは河童なりしとなり。今もその胡桃大木にてあり。この家の屋敷のめぐりはすべて胡桃の樹なり。

これは、曾祖母が幼かった頃の話であるため、喜善が知り得る話ではない。したがって、曾祖母が喜善に語ったことになる。同様に、喜善が喜善の親族から聞いたと思われる話に、「遠野物語」六九話のオシラサマの由来を佐々木喜善の祖母の姉から聞いた話、「遠野物語」八四話の喜善の祖父から西洋人のことを聞いた話、拾遺一五八話の喜善の曾祖父の臨死体験の話などがある。そこで、これらの用例を後藤総一郎監修『注釈遠野物語』所収の家系図【資料2】に当てはめて考えてみたい。⁴

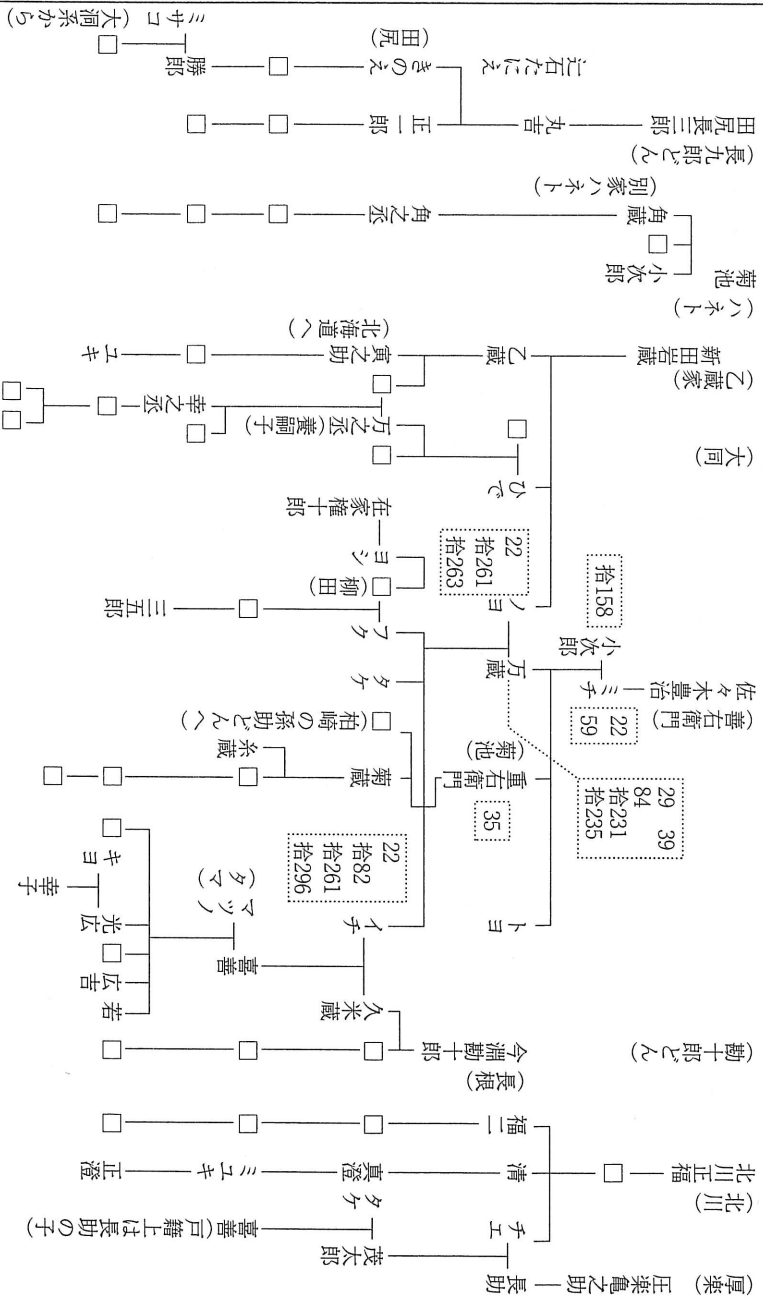
系図を見ると、喜善の両親よりも、喜善の曾祖父・曾祖母、祖父・祖母の用例が多い。これらの人々は、単純に話の登場人

物として物語に登場するのみではなく、喜善に話を伝えた人たちでもあるのである。⁵つまり、喜善は話を親子間で伝承していたのではなく、祖父母と孫という一世代離れたところで伝承していたということになるのである。このような話の伝承のされ方は、実際に「遠野物語拾遺」二九六話の叙述にも見られる。

五月五日は薄餅を作る。…薄餅の由来として語り伝えられている話に、昔ある所にたいそう仲のよい夫婦の者がいた。夫は妻が織った機を売りに遠い国へ行つて幾日も幾日も帰つて来なかつた。その留守に近所の若者共が、この女房の機を織っている傍へ来て覗き見をしては、うるさいことをいろいろしたので、女房はたまりかねて前の川に身を投げて死んでしまった。ちょうど旅から夫が帰つて来てこの有様を見ると、女房の屍に取りすがつて夜昼泣き悲しんでいたが、後にその肉を薄の葉に包んで持ち帰つて餅にして食べた。これが五月節句に薄餅を作つて食べるようになった始末であつたという。この話は先年の五月節句の日、佐々木君の老母がその孫たちに語り聞かせるのを聞いて、同君が憶えていたものである。

拾遺二九六話は、この話は、薄餅の由来を語つた話である。傍線部のように、喜善の母が孫に向かって由来譚を語つたと叙述されており、「遠野物語拾遺」の叙述も、話の伝承が隔世で

【資料2】『遠野物語』関連系図【柳田三五郎による】



(後藤総一郎監修 『注釈遠野物語』より引用)

行われることを裏付けている。

一方で、喜善の話の仕入れ先は、喜善の親族だけにとどまらない。前述した喜善関係の用例をまとめなおしたものが次の【資料3】である。

【資料3】 喜善関連の用例について②

喜善本人	遠野物語	遠野物語拾遺
喜善の親族	三例	一一例
喜善の友人・知人	一〇例	八例
喜善の近所の人	〇例	六例

この表から、「遠野物語」から「遠野物語拾遺」になると、喜善本人の体験談、友人・知人の話、近所の人の話が増えていることがわかる。つまり、喜善は、「遠野物語拾遺」の段階で、話を増やすために、喜善自身の話、親族以外の友人・知人の話も積極的に取り込んだことがうかがえる。

三、遠野物語における地名について

— 土淵村を中心に —

続いて、『遠野物語』における地名について考えてみたい。『遠野物語』には、遠野の内外を含め、一〇〇〇強の地名の用例が

ある。その用例を、遠野郷一町十ヶ村に限定してまとめたのが次の【資料4】である。この表を見て気付くことは、「遠野物語」「遠野物語拾遺」ともに土淵村内の地名の用例がそれぞれ三四%、二五%と、他の村内の地名と比較すると非常に多いことである。「遠野物語拾遺」になると、他の村や町の用例も増えるが、それでも土淵村の用例は全体の四分の一を超えている。このデータから、「遠野物語」「遠野物語拾遺」の中心が、土淵村にあることが分かる。

そこで、次の段階として、土淵村のどこに物語の中心があるのかを考えてみたい。そのためデータをもとめたものが、次の【資料5】である。

【資料5】のデータは、「遠野物語」と「遠野物語拾遺」を区別することなく、一括したデータである。このデータを見ると、大字栃内と大字山口の用例が、他の地域の用例と比較して多いことがわかる。また、栃内と山口に関しては、小字まで細かく叙述されている。この【資料4】【資料5】のデータから、『遠野物語』の中心は、土淵村栃内、土淵村山口といった場所にあることが明らかになる。

そこで、物語の中心となる土淵村山口について分析したい。土淵村山口については、遠野物語研究所編『カッパの世界』に詳細な地図があるので、それを【資料6】として引用しておく。⁽⁶⁾『遠野物語』における山口の用いられ方には、一つの傾向がある。それは、山口+名前、あるいは山口+屋号で叙述されることで

【資料4 『遠野物語』における遠野の地名】

町村名	『遠野物語』	「遠野物語」	「遠野物語拾遺」
遠野町	67 (6.3%)	5 (1.5%)	62 (8.3%)
土淵村	298 (27.9%)	111 (34.3%)	187 (25.1%)
附馬牛村	39 (3.7%)	12 (3.7%)	27 (3.6%)
松崎村	31 (2.9%)	7 (2.2%)	24 (3.2%)
青笹村	31 (2.9%)	5 (1.5%)	26 (3.5%)
上郷村	35 (3.3%)	5 (1.5%)	30 (4.0%)
小友村	26 (2.4%)	2 (0.6%)	24 (3.2%)
綾織村	42 (3.9%)	3 (0.9%)	39 (5.2%)
鱈沢村	8 (0.7%)	1 (0.3%)	7 (0.1%)
宮守村	7 (0.7%)	1 (0.3%)	6 (0.08%)
達會部村	2 (0.2%)	2 (0.6%)	0 (0.0%)

【資料5 『遠野物語』における土淵村の地名】

村	大字・字	用例数
土淵		86
	厚楽	1
	五日市	2
	恩徳	2
	角城	5
	久手	3
	水内	2
	本宿	3
	飯豊	9
	柏崎	12
	土淵	1
	栃内	24
	大楢	3
	琴畑	23
	西内	5
	野崎	6
	林崎	5
	山崎	5
	和野	13
	山口	34
	大洞	5
	高室	3
	田尻	4
	火石	6
	丸子立	3

ある。用例数で言えば、二一例あり、全体の六〇%以上を占める。具体的な例として、次の二つの話を指摘しておく。

「遠野物語」一八話

ザシキワラシまた女の児なることあり。同じ山口なる旧家にて山口孫左衛門といふ家には、童女の神二人いませりと云ふことを久しく言ひ伝へたりしが、ある年同じ村の何某といふ男、町より帰るとて留場の橋のほとりにて見馴れざる二人のよき娘に逢へり。……

「遠野物語拾遺」七四話

土淵村山口の南沢三吉氏のオクナイサマは、阿弥陀様かと思ふ仏画の掛軸であるが、見れば眼が潰れるから見る事が出来ぬといっている。……

「遠野物語」一八話は、山口孫左衛門家の没落を語った話、「遠野物語拾遺」七四話は、オクナイサマについての話である。いずれの話も、山口十人家の名前という形になっている。このように、『遠野物語』の山口については、人名や家の名前と深く結びついている。

もちろん、物語には、人名や家の名前に結びつかない山口の用例もある。具体的には、「遠野物語」三六話と「遠野物語拾遺」九話の二ツ石山に関する話、「遠野物語拾遺」一三二話の梵字沢

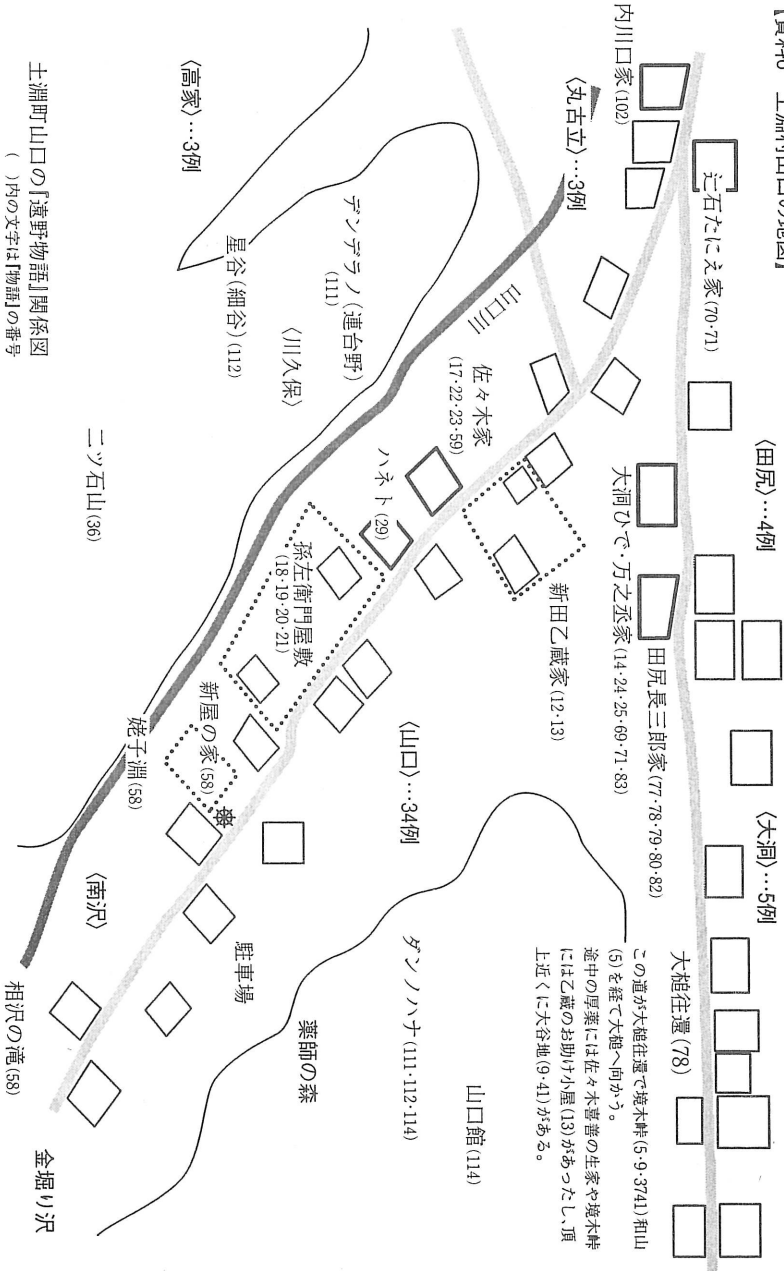
館の話などである。しかし、こういった用例は少なく、物語の用例からは、山口がどのような場所であったのかはわからない。「遠野物語」の山口の用例からわかることは、山口にどのような家があり、また、どのような人が住んでいたのかである。つまり、物語において、山口という地名は、人物を特定するために機能しているということになるのである。

では、なぜ「山口の……」という表現をしたのが、問題になる。その答えは、語り手の佐々木喜善にあるだろう。佐々木喜善は、土淵村山口に住んでいた。語り手である喜善が住んでいた地域と同じ地域にいたということを、山口十人や家の名前は意味する。つまり喜善がよく知っている人や家についての話だということになるのである。それは、柳田が序文で言ったところの「目の前の出来事」や「現在の事実」に対する信頼性を保証する表現となっているのである。また、喜善の意識としては、山口にながめるのかということよりも、誰が住んでいて何をしたのか、また、どのような家だったのかといった人や家に対する関心が強かったことが、『遠野物語』の用例から分かるのである。

四、まとめ

本論は、『遠野物語』における佐々木喜善や土淵村といった固有名詞から物語を読み直そうという試みである。佐々木喜善に関しては、初版序文から話の語り手として『遠野物語』と関

【資料6 土淵村山口の地図】



この道が大槌往還で境木峠(5・9・3741)和山(5)を経て大槌へ向かう。途中の厚葉には佐々木普普の生家や境木峠には乙蔵のお助け小屋(13)があったし、頂上近くは大谷地(9・41)がある。

(遠野物語研究所『カッパの世界』(ゼミナール97 in遠野)より引用)

わっていることがわかる。それ以外にも、用例を調べることで、語り手と書き手の力関係、佐々木家における話の伝承のされ方、また、話の仕入れ先といったことまで分かるのである。また、土淵村山口については、用例の数から、紛れもなく『遠野物語』の中心であることがわかる。また、土淵村山口の用例では、山口という地名が住人や家に結びつくことが多く、それが序文における「目前の出来事」や「現在の事実」を保証していることなどを論証してきた。

柳田国男は、固有名詞の問題を伝説と昔話の対比から考えている⁷⁾。この対比において、固有名詞が問題になったのは伝説であった。しかし、伝説研究は話型論へと傾き、固有名詞の持つ意味については、ほとんど顧みられてこなかった。つまり個々の話の固有性は切り捨てられてきたのだ。今後は、伝説などの口承文芸における固有名詞について、その固有性を分析していく必要があるだろう。

注

(1) 今春完成し、石井正己監修、青木俊明・表賢司・菅沼秀行・多比羅拓編『遠野物語辞典』(岩田書院 二〇〇三年)として出版された。

(2) 石井正己『遠野物語の誕生』(若草書房 二〇〇〇年)に詳しい。なお、以後、遠野物語本編は「遠野物語」、遠野物語拾遺は「遠野物語拾遺」、遠野物語本編と遠野

物語拾遺の両者を指す場合は『遠野物語』と表記する。また、『遠野物語』のテキストは、角川文庫本を用いる。

(3) 石井正己監修、青木俊明・菅沼秀行・多比羅拓編『時の扉』一三号 二〇〇三年三月

(4) 後藤総一郎監修『注釈遠野物語』筑摩書房 一九九七年

(5) なお、喜善の母親イチも物語には登場するが、イチが話を喜善に伝えたと考えられる用例はない。

(6) 遠野物語研究所『カッパの世界』(『遠野物語』ゼミナール97 in 遠野) 一九九八年

(7) 柳田国男「昔話と伝説と神話」『口承文芸史考』所収『定本柳田国男集』第六巻 筑摩書房 一九六八年)

(あおき・としあき/静岡県立伊東高等学校)